

# 検査の現場から

## 「検査官の役割」

公認会計士監査審査会が発足して約10年あまり、会計不祥事に対する社会的注目が高まる中、事後規制社会における資本市場の健全性を担保する上で、審査会検査が果たす役割の重要性はさらに増してきています。審査検査室においては、公認会計士、民間専門家、行政官等が、公認会計士監査検査官として共に連携し、また、私のほか複数の女性検査官も勤務しており、多様な価値観が交わる中で、監査事務所に対する検査に関連する様々な問題点等について、議論を重ねながら検査を実施しています。

審査検査室における検査の現場を通じて強く考えさせられるのは、国民経済の健全な発展に寄与するという公認会計士の社会的使命と公益性です。なぜなら、検査の現場において直面する重要な問題は、それが生じた根本原因を突き詰めていくと、多くの場合、公認会計士の使命に対する自覚を問うものになるからです。公認会計士は、職業柄、多様な企業の監査を通じて異なる価値観や文化に接する機会がありますが、それでもなお、監査業務の現場においては、企業と会計士という、限られた世界で思考が完結していることを、自らの反省とともに痛感させられる機会が数多くあります。

また、検査官には、会計監査に関する知識や経験というスキルのみならず、常に会計監査の社会的役割に対する問題意識を保持して検査に臨むことが求められます。検査の現場において、個別の監査業務の不備を形式的に指摘するのみでは、例えるなら骨折を絆創膏で手当てするような場当たりの対応を生み出し、監査現場は対応に疲弊する一方で、問題の根本的な解決には繋がりません。したがって、問題が生じる本当の原因は何か、それを治癒するために何をなすべきか、ひいては怪我をしない身体作りのためにはどうすべきか、検査の現場において血の通った議論を行い、資本市場の公正性と透明性を高めるため、監査業務の品質の「実質的な」改善に繋げていく必要があります。そのために、審査会検査が果たすべき役割、すなわち、監査業務の品質改善を通じて会計監査に対する社会的信頼の向上に寄与するということを、常に意識することが求められていると感じます。

検査の仕事は、検査等を通じて把握した問題を、監査制度のあり方を含め内外において議論し、改善に向けて取り組むことができる、非常にやりがいのある仕事です。様々な監査事務所における監査業務の横断的な検査を通じて、監査の品質管理のあり方を考える機会を得られることは、再び監査業務に携わる場合においても、会計士としての視野を広げる貴重な経験になると確信しています。

